

「あの子は可愛いは可愛い」の意味

—形容詞の同語反復構文の意味とカテゴリー化に関する一考察—

阪口 慧

keisakaguchi24@gmail.com

キーワード： 形容詞 同語反復 程度性 トートロジー 程度性の同質化

要旨

本稿では「あの子は可愛いは可愛い」の様に使われる形容詞の同語反復表現の意味と解釈を扱い、その構文の特徴、発話において用いられた場合の意味・機能を明らかにすることを目的とする。これまで同語反復構文の研究において形容詞の同語反復を扱った研究はないが、名詞の同語反復、いわゆるトートロジーに関しては多くの研究（藤田 1988, 坂原 2002, 酒井 2007 等）がある。本稿ではそれらの研究を基盤に分析を行い、形容詞の同語反復文はカテゴリー化の側面で名詞のトートロジーと類似の特徴を持つことを示す。その上で、形容詞同語反復構文「XはAはA」（Aは形容詞とする。以下同様。）という形式を用いる場合、発話者は「XはA」という命題の真偽については積極的に真であると肯定しつつ、（1）構文内に表れる形容詞が示す事態・評価・判断・特性などの程度性（あるいは甚だしさ）を弱めたり強めたりする表現として働く場合があること、（2）構文内に表れる形容詞の持つ評価的極性（プラスイメージ/マイナスイメージ）と逆転した評価・判断の存在が含意される、という特徴があることを示す。そして、このような構文の意味は、どのような概念化、カテゴリー化を反映しているかを明らかにすることを目指す。

1. はじめに

本稿では、日本語の形容詞の同語反復表現の意味と解釈について扱う。「XはA（形容詞）はA」という形式を取る場合、「XはA」という形容詞述語文と異なり、「XはAはA」という形容詞の反復述語は話し手の対象Xに対する複雑な評価、判断が表れていることを示すことを目的とする。なお、本稿で扱う形容詞同語反復表現は下の（1a）の様に、イ形容詞が表れるものとする。まず、簡潔に述語としての形容詞同語反復表現と形容詞述語文を比較してみたい。

- (1) a. あの子は可愛いは可愛い
- b. あの子は可愛い

例文（1a）の様に、評価・判断に関わる形容詞が反復して用いられる場合、（1b）の様に形容詞が単体で表れた通常の形容詞述語文に比べて話し手の対象「あの子」に対する評価が複雑

化している。例えば、(1a)は「あの子が可愛いことは事実だが、他にになにかしらの特徴や性質、特にネガティブな特徴がある」と解釈されるケースが多い。または、「そこまで飛び抜けて可愛いわけではないが、可愛いかそうでないかといえば可愛い方である」という「可愛さ」の程度性に関して変更が生じているものとする解釈も可能である。本稿では、これまでの名詞の同語反復文、いわゆるトートロジーの研究において構築された理論(坂原 2002)を基盤に分析し、形容詞の同語反復構文とカテゴリー化の関わり合い、そして、認知主体の客体に対する評価・判断がどのように複雑化しているかを示す。尚、例文はBCCWJ(日本語書き言葉均衡コーパス)から採取した例を用いる。必要に応じて作例を交えつつ分析を行う¹。

2. 先行研究

先述の通り、形容詞が表れる同語反復構文を扱った研究は今までないが、形容詞の同語反復構文は名詞の同語反復文、トートロジーと類似点がある。ここでは坂原(2002)、酒井(2007)阿部(2008)を中心に名詞のトートロジー研究を概観する。

2.1 坂原(2002)：トートロジーの意味とカテゴリー化

まず、坂原(2002)はトートロジーには記述、同定、記述拒否、同定拒否の4つの用法があるとする。そして記述トートロジーは2つの対照的な解釈が可能であり、それらを同質化トートロジー²、異質化トートロジーと呼んでいる。2つのトートロジーの差異は次の図によって整理出来る。

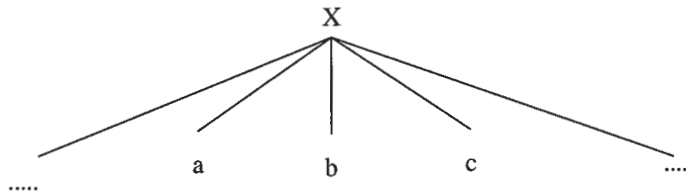


図1 カテゴリーXとそのメンバー：「XはX」はメンバー間の同質性を焦点化(坂原 2002:110)

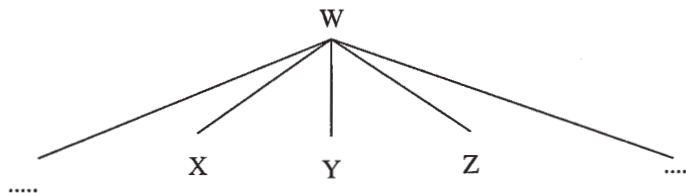


図2 カテゴリーWとそのメンバー：「XはX」はメンバー間の異質性を焦点化(坂原 2002:111)

¹ 本稿で扱う表現は話し言葉でも多く使われるため、日本語話し言葉コーパス、名大会話コーパスも併用し用例採取を試みたが、「XはAはA」という形式に当てはまるデータは観察されなかった。

² 同質化トートロジーは藤田(1988)における等質化と同様の概念である。

「XはXだ」というトートロジーにおいてXがあるカテゴリーを示すものである場合を示したものが図1である。一方、Xがあるカテゴリーに属すメンバーの1つであることを示すものが図2である。これを前提に次の例を考えてみたい。

(2) ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ。(坂原 2002: 113)

(3) ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。(ibid.:112)

例文(2)は同質化トートロジーの例である。同質化トートロジーの解釈は「カテゴリX内部のメンバ間の同質性を焦点化する。このときは、カテゴリXとそのメンバを考えている」(坂原 2002: 109)というものである。(2)を例に考えると、ネコというカテゴリーに属す様々な猫にはネズミを捕まえることの出来るものもあれば、そうでないものもあるが、それらの差異を否定し、どれも同じくネコであるという解釈である。図1に当てはめる場合、ネコがX、ネズミを捕まえるネコがa、ネズミを捕まえられないネコがb、蛇を捕まえるネコがc、などと置き換えるとよい。

次に、例文(3)は差異化トートロジーの例である。差異化トートロジーは「カテゴリW内部のメンバ間の異質性を焦点化する。このときは、XをカテゴリWのメンバとして捉え、かつWの別のメンバYと対比している」(坂原 2002: 110)というものである。(3)の例で考えると、Wはネコ、Xはネズミを捕まえるネコ、Yはネズミを捕まられないネコが当てはまる。XもYもネコというカテゴリWには属しているものの、その中で有益性などの観点からもっとも好ましいネコ、典型的なネコを想定し、それに当てはまるXは他のもの(Yなど)と異なっているというカテゴリ観を示している。また、坂原(2002)は異質化トートロジーは、トートロジーが連続して表れることが多いことを示している。

(4) 雑種は雑種、ハスキーはハスキーだ。(坂原 2002: 123)

このトートロジーでは、イヌというカテゴリーにおけるメンバーである雑種犬、ハスキー犬の違いを焦点化している。また、坂原は述語的なトートロジー「NPは、XはXだ」といった形式の場合には、対象NPがあるカテゴリーにおけるマージナル(周辺的)なメンバーであることを示すことがあるという点を指摘している。次の例をみよう。

(5) a. 花子は女の子は女の子だ

b. 花子は女の子は女の子だが、スカートをはかない。

この例において、花子は女の子というカテゴリーに所属はしているが典型的なメンバーではないことが示される。(5a)の述語的トートロジーに対し、「スカートをはかない」などの付

加を行った (5b) が自然な表現であることから、花子は女の子として典型的でない特徴³を有しているといったマージナル性を強調した表現であることがわかる。

以上、坂原 (2002) で提示されたトートロジーの中で形容詞の同語反復構文に関連する議論を概観した。同質化概念を巡った概念の混乱に関わる問題を酒井 (2011) が指摘しているが、本稿では深くは立ち入らない。なお、述語的トートロジーに関しては酒井 (2007) について詳しい言及があるため、次節にて概観する。

2.2 酒井 (2007) : 述語的トートロジーの意味

酒井 (2007) は坂原 (2002) の議論を受けて、述語的トートロジー「NPはXはXだ」と、文的トートロジー「XはXだ」を明確に区別し、形態論的、統語的、意味論的な証拠を提示しつつ「XはXだ」によって定型句的述語が存在していることを示した。

- (6) a. 人形遊びが好きでも男の子は男の子だ。
b. 太郎でも男の子は男の子だ。 (酒井 2007: 162 (79))

上記 (6a) と (6b) は譲歩表現が付随している点、何らかの対象に対する発話である (この例では「太郎」となる) 点、特定の個体があるカテゴリー (この例では「男の子」となる) に属すことを示している点で共通している。しかし、「～でも」の部分の主語とし、Xを述語とするパラフレーズをすることで「太郎 \in 男の子」を示せるかという点で違いが生じる。

- (7) a. #人形遊びが好き (なの) は男の子だ
b. 太郎は男の子だ。 (ibid.:161 (80))

(6a) をパラフレーズした (7a) は不自然な文で有るのに対し、(6b) をパラフレーズした (7b) は自然な文となる。これは、Aに該当する部分が (6a) では命題であるのに対し、(6b) の場合は名辞であることが理由として考えられる。酒井 (2007) は (7b) に類する「NPでもXはXだ」の「XはXだ」は定型句的述語であることを、形態的不変性が高いこと、NPをターゲットとして尊敬語化が可能であること、NPが目的語として繰り上げ可能であること、他の一項述語と等位接続が可能であることを根拠とし、「NPはXはXだ」の「XはXだ」の部分が一項述語として機能していることを示している。そして、述語的トートロジーの意味を次のようなものと定義する：

³ 女の子らしさ、典型的な女の子とは何かという点に言及する場合、慎重に議論を行う必要はあるが、本稿では深くは扱わない。なお、ここで提示している女の子らしさ (スカート着用の有無など) が筆者の特定の思想や女性観を示しているものではないことを断っておく。

(8) 述語的トートロジー「XはXだ」の意味

- a. 前提：主語NPの指示対象が述語Xの外延に対して典型的には期待されない属性を持つ
- b. 断定：主語NPの指示対象は述語Xの外延に属する。 (酒井 2007:157 (84))

なお、この形式におけるXに関しては統語範疇的な制約がないことも指摘している。この点を考慮すると、形容詞同語反復構文は述語的トートロジーの亜種である可能性がある。「彼女は可愛いは可愛い」のNP「彼女」は「可愛い」の外延として典型的ではない特徴を有するという解釈も考えられる以上、(8)の意味に当てはまる。

2.3 阿部 (2008) : トートロジーと主観性

阿部 (2008) はこれまでの同質化、差異化、実現要請に関わるトートロジーを主観性という観点から分析し、トートロジーは発話者が「望ましさ」あるいは「望ましくなさ」が関与しているとする。阿部 (2008) の議論は坂原 (2002) において提示されている「ネコの中でもネズミを捕るネコが本当のネコである」といった属性の操作、あるいは設定により、メンバーのカテゴリーに対する所属度合いの差異を設けるといったアプローチを「望ましさ/望ましく無さ」という主観性の概念を通して整理したものである。次の例を見よう。

- (9) ?1分でも、授業は授業だ (望ましさ/望ましく無さの関与が不明)
- (10) 1分でも映画出演は映画出演だ。 (「映画出演」は望ましさが関与する)
- (11) 1分でも遅刻は遅刻だ。 (「遅刻」は望ましくなさが関与する)

(阿部 2008: 214)

「NはXはXだ」という形式におけるXが望ましさ、望ましくなさのいずれかを喚起する場合、発話者の主観性を伝えるためトートロジーは自然な文となる。(10)における「映画出演」は通常、出演時間が長ければ長いほど望ましさは増大する。そのため、「1分の映画出演」は通常望ましくない「映画出演」であるが、それを他のものと同質化する。反対に、(11)における「遅刻」は長ければ長いほど望ましくなさが増大するため、望ましくなさが小さい「1分の遅刻」であっても遅刻では遅刻であると、他のものと同質化している。(9)も(10)(11)と同様に1分が話題であるが、特定の文脈を設定しない限り望ましさ/望ましくなさによる同質化、あるいは再同質化が出来ないため不自然な文であるとする。例えば(9)の例は次の様な文脈を設定すれば、望ましさの観点から再同質化が可能であるとする。

- (12) (1分だけ講義をして帰ろうとした教授が、学生に手抜きを非難されて)
「1分でも授業は授業だ。他の先生とか事務にはいうなよ」(阿部 2008:214)

(12)の例において、手抜きを非難した生徒の視点から考えると、望ましい授業とは設定され

た授業時間を十分に使う講義であるが、話し手である先生は自分の1分の講義は望ましさが低いものとは知りつつも、他のものと再同質化しているということである。なお、再同質化に関しては次の議論が本稿で扱う形容詞の同語反復と関わる点であるため、長めに引用する。

あるカテゴリーが「望ましき」あるいは「望ましくなさ」のどちらかで「再同質化」されるのではなく、「望ましき」の元の程度（それは非常に低い（＝望ましくない）段階から非常に高い段階までさまざま）に再同質化される、と考えべきであろう。例えば、「いくら親切でも、隣人は隣人だ。親友ではない。」「いくら快適でも、ホテルはホテルだ」では、高くなりかけたすでにかなり高い「望ましき」の程度を、元のかかなり高い「望ましき」の程度に「再同質化」している。
(阿部 2008: 220)

この議論を換言すると、阿部（2008）は望ましきという概念を段階性（gradience）のあるものと捉え、トートロジーはその程度性を操作するものと捉えているわけである。この点においては本稿で扱う例も似た特徴を有する為、形容詞構文において望ましき/望ましくなさといったスケールはどの様に関わるか議論する。尚、本稿では阿部（2008: 212）で主張されている「トートロジーとは情報をあえて空にして、文の枠組みだけを残したものである。しかし、こうすることによって空の部分は主観性によって埋められる。文は主観性を表現するための手段となる」といった主観性仮説⁴の是非（c.f. 酒井 2010）に関しては議論の対象とはしない。

3. トートロジーの理論による形容詞同語反復構文の分析

前章にて、先行研究を概観し、名詞のトートロジーの意味を扱う上でどの様な部分が議論の対象となっていたかを観た。名詞のトートロジーの分析において構築された理論は、形容詞の同語反復の分析にそのまま応用できるものと、そうでないものとある。そのため、形容詞同語反復構文において、差異化、異質化、同質化というカテゴリー化がどの様な意味的なレベルで生じているか慎重に議論を行う必要がある。ここで、本稿で扱う言語現象及び何が疑問であるかを再確認する。

(13) a. あの子は可愛いは可愛い

b. あの子は可愛い (1) の再掲

(14) 解釈 1: あの子が可愛いことは事実であるが、何か別のネガティブな特徴が含意される。

(15) 解釈 2: あの子が可愛いことは事実であるが、飛び抜けて可愛いわけではない。

本稿で議論したいのは (13a) から (14) (15) の様な解釈が得られるのは何故かという点である。(14) (15) の様な解釈は (13b) からは得られないものであり、「XはAはA」という形式

⁴ 主観性仮説という呼称は酒井（2010）による

によって喚起される構文的な意味であると言える。結論を先に述べると、(14) の解釈は名詞のトートロジーで示された差異化トートロジーと同様のカテゴリー化が働き、(15) の解釈は同質化トートロジーと同様のカテゴリー化が働いていると考える。また、「X は A は A」の実例を観察すると、異質化トートロジーに類するものも観察される。

トートロジーが連続する例において類語が連続することによって、アドホックにメンバーとカテゴリーの階層関係の構築が行われ、メンバー間の異なる点を焦点化するカテゴリー化、つまり異質化が表れている例がある。3.1 節ではその様な例を扱う。では、同質化、差異化はどうか。結論から言うと、同質化や差異化といったカテゴリー化も、形容詞の同語反復構文においても観察される。形容詞反復構文が反映するカテゴリー化には形容詞の持つスケール性（程度性）が関連しており、程度性の調節という部分において同質化が行われることを示す。これを 3.2 節で扱う。これにより (1a) の解釈として「そこまで飛び抜けて可愛いわけではないが、可愛いかそうでないかといえは可愛い方である」という解釈が可能なのは何故かという問いに答えることとなる。3.3 節では差異化及び述語的トートロジーの亜種であるかどうかという部分に関して扱う。

3.1 異質化型 形容詞同語反復構文

「A は A」という形式をとるものの中に、名詞のトートロジーと同様の説明が出来るものが観察された。次の例をみよう。

- (16) いただきまーす。ピリッはピリッと、辛いは辛い、甘いは甘い。はっきりしている。野菜と肉の甘さと香りとうまさが[...](BCCWJ: PB15_00016) ⁵

この例はある料理の味に関して言及する文である。通常、料理は様々な味を与える食材や調味料が重なり合って 1 つの料理が出来上がる。そのため、1 つの対象が様々な味を有する。(16) では、ある料理において辛味を与えるもの、甘みを与えるものが明確に区別出来ることを示している。また、「辛い

3.2 同質化型 形容詞同語反復構文

同質化カテゴリーは、周辺のメンバー、あるいは典型的でないメンバーがそのカテゴリーの一員であることを焦点化するが、形容詞にも同様の例は観られる。しかし、形容詞はカテゴリーやメンバーを示す役割ではない。そのため単純に名詞のトートロジーにおいて立てられたカテゴリー化つまり、モノとモノ、それは包含する名称の比較などによる概念化とは異なる概

⁵ コーパスより採取した例は例文の末尾に使用コーパスとサンプル ID を次のように示す: (コーパス名: サンプル ID) 尚、例文における下線は筆者による。

念化を立てる必要がある。形容詞は通常、ある対象（人や物）の特性を指し示す場合、「さししめされる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、なんらかの基準との比較のなかでもとらえられている」樋口（2001: 43）といった品詞の特徴がある。つまり、基準との比較は形容詞の意味的な重要な一側面である。次の例をみよう。

- (17) 自分は、耐えられないほどに痛い思いをしているのだろうか？痛いは痛いが、耐えられないほどではない。
(BCCWJ: LBf9_00221)

(17) の例では、発話者（書き手）は、前の文脈において自分が感じている痛みの度合いが本当に耐えられない程の痛みなのかと自問する。そして形容詞の同語反復を経て、後文脈でその痛みの度合いは耐えられないほどのものではないことが示されている。ここで何が同質化されているかというと、痛みの度合いである。この説明の為に、Langacker（2008）の形容詞の概念化の説明を導入する。

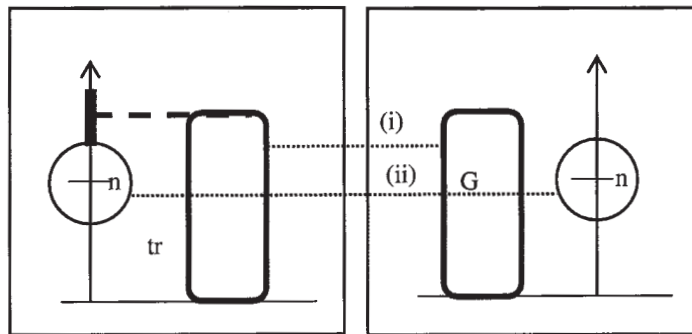


図3 tall giraffeの概念化 (Langacker, 2008:187)

まず図3の左側のボックスから説明する。tallの認知図式はある基準点（norm、図内ではnと示されているある程度の範囲（range）を持った円）に対して垂直方向に関して高いこと、そしてその対象がトラジェクター（trajector、図内ではtrと示される）としてプロファイルされること（図内では太線で示される）が示されている。右側のボックスは一般的なgiraffe（キリン）の高さという基準（norm）よりも高い特定のgiraffe（図内でGと示されたもの）を示している。そして修飾の対象であるため、こちらもプロファイルされている。(i)の点線はtallによって形容される対象と特定のgiraffeの同定が為されていることを示す。(ii)の点線はtallの基準点と一般的なgiraffeの高さの同定が為されていることを示す。この様に、形容詞の意味の概念化には対象が持つ特徴や事態の程度性と基準が関係する。この説明は樋口（2001）とも整合する。例えば「痛み」も程度の異なりによって様々な痛みが存在する。多少チクチクする様な指にトゲが刺さっている時の、時々気になる程度の痛み。急性腸炎のような少しも動けなくなるような痛み、あまりの痛さで意識が遠のくような痛みなど、様々である。そして、(17)にお

ける「痛い痛い」は現在感じている痛みが他の痛みなどと比較しても、自分にとって基準を満たした痛みでと同程度の痛みであるということを示していると考えられる。換言すると、自分が体験してきた他の痛みとの程度性との同質化が行われていると言えるのではないだろうか。ここで、図1及び図3を基盤に、説明を図式化する。

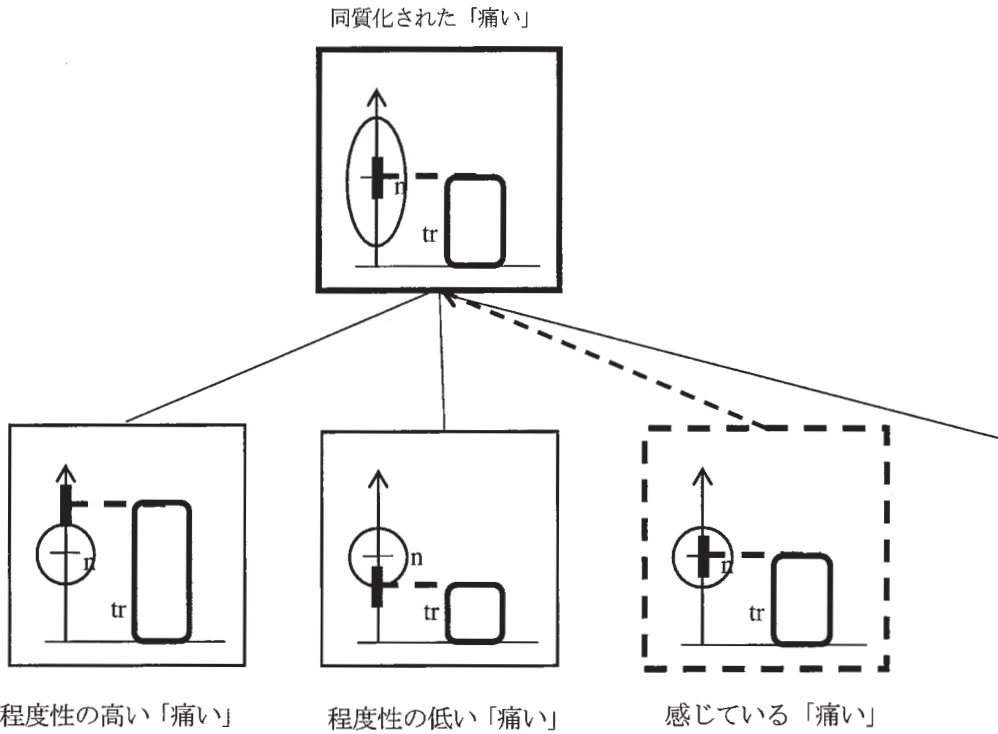


図4 「痛い痛い」が反映するカテゴリー化：痛みの程度性の同質化

図4の各認知図式においてトラジェクターとして示されている太線のボックスは痛みの度合いを示している。そして坂原(2002: 110)の図1と同様に、様々な程度の痛み(図4下側3種類の認知図式)に対し、その程度性の差異を抽象化して同質化する。そして、比較対象と鳴る様々な痛みに対し、現在感じている痛み(図中では「感じている「痛い」」)は他の物よりも認知的に際立っている。しかし、これは同質化されるためにより「同質化された痛い」の方が際立つ。この際立ちの変遷をプロファイルシフトと捉え図中の太破線矢印で示した。この同質化において、様々な痛みの程度性が同一視されるため、図4の上側、抽象化された「痛い」の認知図式における基準の範囲は広いものとなっている。(17)の例において、同質化の対象となっているのは、話し手が耐えられないほどなのかと自問している「痛み」であり、それはその他の痛みや、自分の中で「痛い」と感じる閾値、認知図式でnとして示される基準と比較して、それは確かに「痛い」と言えるものであることを認知している。それが「痛い痛い」という同語反復構文として表れているのである。この説明を元に次の例をみよう。

(18) 注射なんて大したことないことは分かっているが、痛い痛い。

(19) a. 非常に痛い聞いていた親知らずの抜歯は、痛い痛い。

b. 非常に痛い聞いていた親知らずの抜歯は、痛い痛い。{#だからほっとけば痛みは治まるだろう/#全く痛くないつまり、痛くないわけではない}

c. 非常に痛い聞いていた親知らずの抜歯は、思ったほど痛くない。{だからほっとけば痛みは治まるだろう/全く痛くない/#つまり、痛くないわけではない}

(18) は「前提知識として程度性の低い痛みであることは知っているが、自分にとっては十分に痛いものである。」といった解釈が可能である。この場合、程度性の低い痛みを他の痛みと同質化しているため、前提知識の痛みの程度性の低さが捨象されている。いわば、平均値よりも低い痛みが平均的な痛みと同質化されるため、その差分において程度性が増加されているような解釈が可能である。反対に(19a)では、「前提知識として程度性の高い痛みであるが、自分にとっては普通程度の痛みである。」といった解釈が可能である。この場合、(18)とは対照的に前提知識として想定していた程度性の極端な高さが捨象される。そのため、程度性が想定よりも弱められているといった解釈が可能である。このとき、単に程度性が低くなっていることを意味しているのではない。(19b)と(19c)の比較では、「痛い痛い」を、程度性を弱めた表現「思ったほど痛くない」に置き換えている。このとき順接で「痛みは治まるだろう」といった内容を接続させると、(19c)の様に、程度性を弱めた表現では自然だが、(19b)の様に、同語反復「痛い痛い」との接続は不自然である。さらに、程度性を完全に否定する表現を接続させた場合(19b)「痛い痛い。全く痛くない」は不自然だが、(19c)「思ったほど痛くない。全く痛くない。」は自然である。一方、程度性の否定をさらに否定する表現を後続させた、二重否定の形をとったもの、(19b)「痛い痛い。つまり全く痛くないわけではない。」のように同語反復の場合にのみ自然である。つまり(19a)における「痛い痛い」は事前に得た知識(伝聞など)に基づいた想定における程度性の極端な甚だしさを捨象し、平均的な程度性に押し戻す意味があるといえる。

以上の議論をまとめると、形容詞の同語反復構文において同質化されるものは、程度性の差異であり、同質化の対象の程度性が甚だしいものであれば、程度性が減少する解釈を与え、程度性が低いものを同質化するのであれば、程度性が強調される解釈となる。これにより(13a)に対し(15)の解釈が可能であることの説明が可能である。これは坂原(2002:122)の述語的トートロジーの説明におけるマージナルなメンバーをカテゴリーに引き戻す働きと同様である。実例では次のようなものが観察された。

(20) 「今までのラーメンで一番～」云々。前フリしすぎである。美味いは美味いんだけど、ねえ。ハードル上げすぎてヤツである。(BCCWJ: OY14_28016)

(21) 味は、バターが私には強かったですが美味しいは美味しいです。チョコレートのプレー

トに名前まで入って両親が慣れない事をしている

(BCCWJ: OY03_02326)

(20) において同質化されているものは、ラーメンの美味しさの程度性であり、前文脈にあるように、対象の美味しさの程度性が非常に高い想定をしていたことが分かる。しかし、後文脈で「ハードル上げすぎ」とあるように、期待ほどの美味しさではなかったことが示されている。そのため、程度性が高いものから平均的なものへ同質化されるため、程度性が弱められている解釈が可能である。(21) においても同様に、ある対象の味に対する評価が行われており、前文脈が示すように、ネガティブな要素を持ちつつも、美味しいことを肯定する。つまり対象の美味しさの程度性は低いものの、他の美味しいものと同質化する。これは阿部(2008)が示した再同質化と似た機能である。なお、これは差異化のカテゴリー化とも関連した事例である。この点に関しては3.4節で再度言及する。名詞の場合には望ましき/望ましく無きといった主観性が関与するとあるが、形容詞の場合にはそれが程度性や基準との比較という部分から説明される。形容詞と主観性、また(20)(21)で使われる様な味覚に関する形容詞に関しては樋口(2001)にこのような言及がある：

「おいしい」という形容詞の評価的な意味は《評価的な構造》のなかで、話し手がいま、その場で評価的な判断を下している、というかたちで発揮されている。そしてまた、その評価的な判断においては、なにをおいしいものと感じるか、そのとき、その場における、話し手の味覚的なセンサーの状態が暴露されてもいる。(樋口 2001 : 62)

この様に、何が美味しいかという評価は話し手の主観性、味覚に対する判断基準に大きく依存する。その上で形容詞反復構文は、対象に対する複雑な評価付け、特にこれまでの自身の体験や他の類似事象との比較を行い同質化するという複雑な概念化を反映する。なお、文脈が無い状態の(13a)を単体で解釈する場合において、どの様なカテゴリー化が生じているかを特定することは不可能である。しかし、聞き手は本稿で述べる概念化のいずれか、またはその複合であるという想定は働くことが予想可能である。

3.3 差異化型 形容詞反復構文

次に、形容詞反復構文においてどの様な差異化のカテゴリー化が反映されているか分析する。差異化が生じる場合は程度性に関する操作ではなく、対象が持ち得る様々な特性や評価において、任意の特性や評価を際立たせる働きがある。次の例を考えてみたい。

(22) A : 君の彼女は可愛いのか？

B : 可愛いは可愛いよ。

(23) A : 君の彼女は可愛いのか？

B : 可愛いは可愛いけど {性格が悪い/声大きい} よ。

(24) A : 君の彼女は可愛いのか？

B : ?可愛いは可愛い。そして {性格が悪い/声大きい} よ。

(22) の B の発話における形容詞反復構文「可愛いは可愛い」は前節で分析した同質化の概念化が反映された解釈も可能⁶であると同時に、差異化のカテゴリー化が反映された解釈としても可能である。その場合、ただ単に「彼女は可愛い」と述べるのとは異なり、「彼女」に対して発話者は「可愛い」と異なる特徴があることを認識しつつもそれを明言していないという解釈が得られる。差異化が反映された場合の解釈として可能なものは「可愛いことは事実であるが何か他にある。」といったものであり、通常「可愛い」と反対の評価性を持つ特徴を有することが想定される。そのため、マイナスな評価語が逆接された (23) における B の発話は自然な表現となる。例えば「性格が悪い」は多くの場合ネガティブ（マイナスイメージ）な評価であるが、「声大きい」こと自体はネガティブなことではない。しかし、「可愛い」という評価と共起する特性として想起するものではない。そのため、可愛さと共起する限りにおいて反対の評価性を帯びていると言える。このような解釈は「彼女は可愛いよ」という命題からは復元あるいはアクセスがしにくい意味であるが、(23) のような形容詞の同語反復文からは復元あるいはアクセス可能であると考えられる。また、(24) で観るように、ネガティブな表現を順接で続けると不自然な表現となる。このように、「X は A は A」に表れる形容詞の評価性と反対の評価性をもつ表現が逆接される方がより自然となる。この点は、酒井（2007）が示した述語的トートロジーの定義により整理される。

「X は A は A」という形式は (8) の述語的トートロジーと同形式であり、酒井（2007）が示すように、述語 X は統語範疇を問われない。そのため、X が形容詞の場合であってもこの定義が応用可能である。この定義に沿って観察すると (22) ~ (24) の例における「彼女」は「かわいい」の外延、つまり「かわいい」が当てはまる対象に対して期待されない属性を持つことになる。つまり、「かわいさ」と反対の評価性を持つ特徴を有するか、あるいは「かわいさ」の程度性を弱めてしまうような特徴を有することが分かる。そのため、(23) (24) が示す様に、反対の評価性となり得る表現を逆接で続ける文が自然となる。

では、このような形容詞の反復ほどの様な概念化を反映しているのだろうか。(22) ~ (24) 「彼女はかわいいはかわいい」の例では、「彼女」は「かわいい」が当てはまる対象が典型的には期待されない特徴を有しつつも「かわいい」という事実は肯定しており、「彼女」が持つ様々な特徴の中でも「かわいい」を焦点化していると言える。後文脈で別の要素が続いた場合、文の線形順序により新情報である特徴（例文 (23) で言えば「性格が悪い」「声大きい」など）が際立つが、「かわいいはかわいい」という情報が提示された段階では、「かわいさ」が他の特

⁶ 同質化の概念化が反映される場合、先行文脈、あるいは発話者 A の発話内で「彼女」の可愛さの程度を下げる旨の発話や、「彼女」の可愛さを疑問視するような発話がある場合（e.g. 「君の彼女は可愛くないよね」「君の彼女は本当にかわいいの？」）、提示された可愛さの程度性を他の程度性が高いものなどと同質化し、程度性が高められ平均化するような解釈が可能である。また、3.4 節で示すように同質化と異質化は同時に行われることもある。

徴よりも焦点化している。これは、差異化のカテゴリー化を反映していると考えられる。無論、形容詞が単体で現れたもの「彼女は可愛いよ」においても、「彼女」が有する様々な特徴の中から「かわいい」を選び取るという点では差異化のカテゴリー化が反映されると言えるかもしれない。ただし、(22A)のような疑問に対し、「彼女は可愛いよ」と答えた場合には上で議論したような解釈が得られない。言いさし文「彼女は可愛いけど」などであれば、上記の議論と同様の解釈が得られる可能性はあるが、(22B)の様に断定文で同語反復が得られた場合に上記の解釈が得られることが、差異化のカテゴリー化が反映されていると主張する根拠である。なお、議論では、語自体が評価性を持つ形容詞の例を扱ったが、次元形容詞の様な例も生起することが可能である。ただし、その場合でも有益性や、阿部(2008)の言うような望ましさなどの観点から、評価的な構造が見出すことが出来る。次の例をみよう。

(25) この部屋は広いは広いけど、天井が低い。

(25)は「部屋」に関する発話である。この時、部屋が持ちうる物理的な特徴「広い」「狭い」「(天井が)高い」「(天井が)低い」などの中で、「広い」ということは肯定される。通常、次元形容詞は評価的な意味を持たない。ただし、そこに発話者の基準や価値観などが加わることで「広い」=「良い」/「悪い」といった評価性を帯びる場合がある。(25)においてこの発話者は「広い」ことと、「天井が低い」ことは評価的に相反した特徴であるとらえていることが分かる。ただし、この時どちらがプラス、マイナスかということは断定不可能である。

- (26) a. この部屋は広いは広いけど、天井が低いから嫌いだ。
b. この部屋は広いは広いけど、天井が低いから好きだ。
c. この部屋は広いは広いけど、天井が高いから嫌いだ。

(26a)では「広い」ことがプラスであり、「天井が低い」ことはマイナスである。(26b)はその逆である。また、(26c)では「天井が高い」が否定的に捉えられている。重要な点はこの様な評価の構造がトートロジーによって与えられている点である。また、前提と断定に関して酒井(2007)の説明では扱えない部分があることも分かる。通常、「広い部屋」であれば典型的には「天井が高い」ことが期待される。酒井(2007)は「NPはXはX」という形式においてXの外延に期待されない特徴をNPが有することが前提であるとするが、この例は反例となってしまう。この様に発話者の評価に関わる場合の述語的トートロジーの意味を下に記す。

(27) 発話者の評価に関わる述語的トートロジー「XはX」の意味

- a. 前提：主語 NP の指示対象が述語 X の外延に対して、発話者が与える評価と相反する評価の根拠となる特徴を有する。
b. 断定：主語 NP の指示対象は述語 X の外延に属する。

この定義に基づけば (1a) の解釈に「あの子が可愛いことは事実であるが、飛び抜けて可愛いわけではない。」というのが何故かという疑問に答えることが出来る。形容詞同語反復の持つ前提により「XはAはA」という形式におけるXは話し手がAによって差し出す評価と反対の評価を持つ。ただし、断定されているのはXはAの外延であるということに過ぎないということであるため、「XはA」という命題は積極的に肯定され、かつ、XはAと評価的な側面で相反する何らかの特徴を有しているという解釈が得られる。なお、この定義は他の品詞が述語Xに現れることも考えられる。

本節の議論を整理する。形容詞の反復構文の中には、差異化の 카테고리を反映したものがある。また、酒井 (2007) の述語的トートロジーの定義を修正した (27) にあるように、差異化によって焦点化されるものは、ある対象 (「XはAはA」という形式におけるX) が有する特徴の1つであり、差異化において比較される特徴はXの特徴Aと通常は共起しない、相反する特徴である。この概念化をモデル化すると次のようになる。

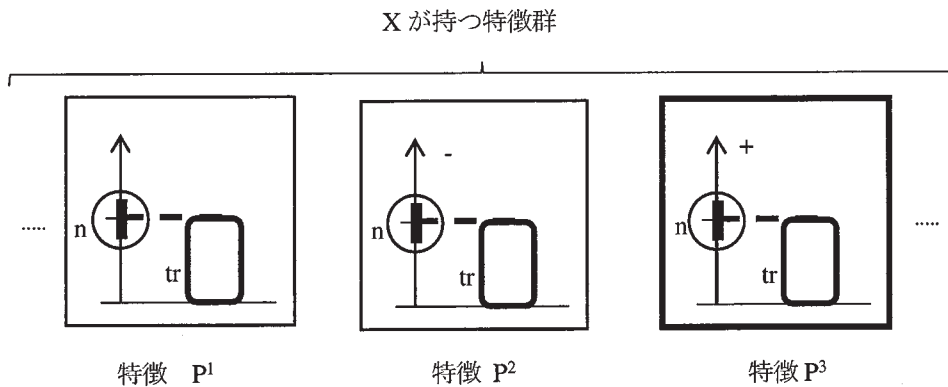


図5 「XはAはA」が反映するカテゴリ化：ある特徴の差異化

上記の図は、形容詞反復構文における差異化の概念化をモデル化したものである。Xは様々な特徴 P¹…ⁿ を持ちうる。そして前提としてある特徴 (この場合は P³) と、相反する特徴 P¹ 及び P² を有する。この時、相反しているのは特徴に対し発話者が持つ評価性 (プラス/マイナス) である。そのため、図内の段階性を表す矢印の横に +、- 記号を記した。なお、図内右下の P³ の認知図式のみ太線で示しているが、これは特徴が際立っていること、つまり焦点化されていることを示している。便宜的にプラスの評価を持つ特徴が焦点化されているが、逆の場合もありうる。

3.4 同質化と差異化の融合

3.2 節で形容詞同語反復構文と同質化の事例を観察し、形容詞同語反復構文が同質化の カテゴリ化を反映する場合には、ある特徴や事態の様々な程度性の差を同質化することを指摘した。

その結果として「XはAはA」においてAが示す自体の甚だしさが強調あるいは弱化されている例を観察した。3.3節では、差異化の 카테고리化を反映する場合には、対象Xが持ちうる様々な特徴の中で1つのもを焦点化すること、そして評価の構造が生じている事を指摘した。例えば「XはAはA」において、Aがプラスな評価性をもつのであれば、Xはそれと反対の評価性を有するという前提があることも指摘した。これらの概念化は同時に生じている場合もある。先述の(21)の例を再度観察したい。

(21) 味は、バターが私には強かったですが美味しいは美味しいです。(再掲)

(BCCWJ: OY03_02326)

まず、この例では味覚に関する表現が2つ表れている。「バターが強い」「美味しいは美味しい」先述の樋口の言及にもあるように、このような表現は話し手の味覚的な感覚及び好みが顕現している。「バターの味が強い」こと自体はプラス/マイナスの評価性を持つものではない。しかし、この文脈においては話し手の好みに基づきマイナスの評価性を帯びていることが分かる。そして「美味しい」という味覚的な評価を差異化している。そして同時にこれはこれまでの「美味しい」という体験などと比較し、「美味しさ」の程度性は低いものの、他の「美味しい」と同質化をしていると考えられる。

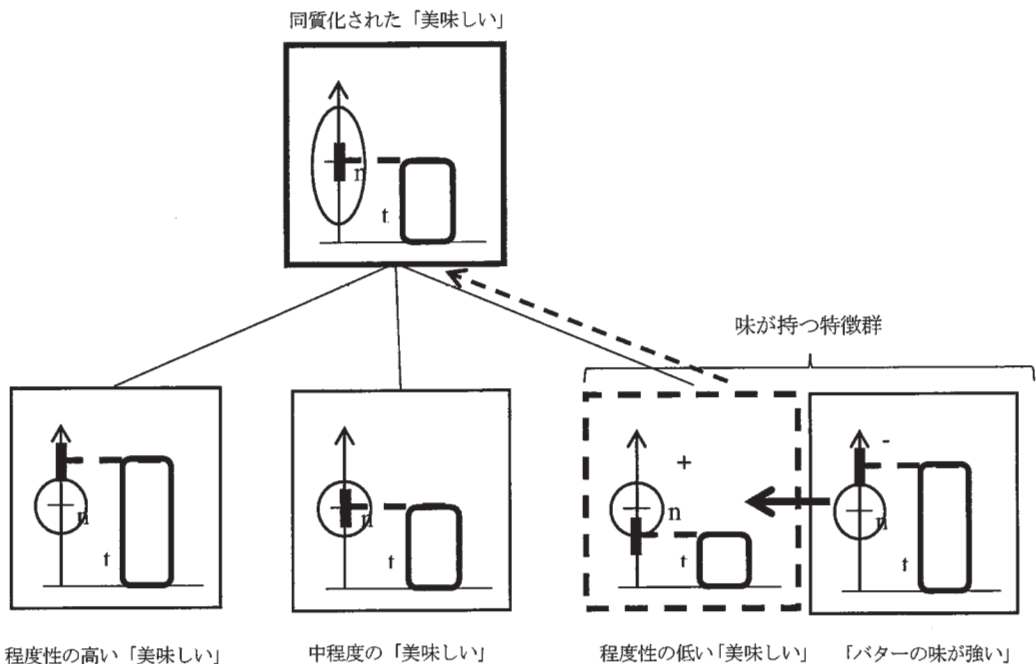


図5 「バターが強いが味は美味しいは美味しい」：差異化と同質化の複合事例

以上の議論を整理し、同質化と差異化が複合したカテゴリー化をモデル化する。図5では、

同質化と差異化が複合している(21)の例のカテゴリー化を図としてモデル化したものである。「バターが強い」の認知図式から「程度性の低い「美味しい」」に伸びる太線矢印はバターの味が強いことが作用していることを示している。そのため、発話者が感じる「美味しさ」の程度は通常より低いものである。ただし、「美味しいは美味しい」の差異化により「美味しい」の際立ちは「バターが強い」よりも高い。そして、程度性が弱体化された「美味しい」は他の「美味しい」の事例と同質化されることで、再び程度性が平均的なものに調整される。なお、「程度性が低い美味しい」と「同質化された美味しい」の認知的際立ちを太線実線と太線破線の異なりによって示した。

4. おわりに

本稿では、形容詞の同語反復構文を分析対象とし、この構文が持っている意味について考察し、名詞のトートロジーと同様の意味的な特徴やカテゴリー化が行われていることを指摘した。そして下記の四点を主張した：

- (28) 形容詞同語反復構文は異質化のカテゴリー化を反映するものがある。坂原(2002)の説明を応用することが出来る。
- (29) 形容詞同語反復構文は同質化のカテゴリー化を反映するものがある。この時同質化されるものは形容詞が意味的な要素として持つ程度性であり、ある事態・特性の程度性を認知主体(話し手)のこれまでに体験した同一事態・特性の、程度性の異なるものと同質化する。
- (30) 形容詞同語反復は差異化のカテゴリー化を反映するものがある。この時、「XはAはA」における「AはA」は「X」に対する評価を差し出すものである。そして、差異化において比較される別の事態・特性はAによって言及する事態・特性と反対の評価性をもつものである。
- (31) 形容詞同語反復構文は同質化と差異化を複合したカテゴリー化を反映するものがある。差異化によって焦点化された事態・特性の程度性が、程度性の同質化によって調整される。

今後の課題としては、他の言語における形容詞同語反復構文に、本稿の説明は応用可能であるかというものが挙げられる。例えば英語において、*Enough is enough.*といった表現がある。口論などにおいて、もう口論は十分だといった強い意思表示、特に既に*Enough!*などの発言があり、その発話によって求めていた口論の停止が満たされない場合に再度、口論を続ける意思がないことの意味表示に用いられることが多い。この場合にも同質化のカテゴリー化が関与していると考えられる。また、他の統語範疇の反復構文との関連に関しては十分な議論が尽くされていない。これらの課題は他稿に譲る。

参考文献

- 阿部 宏 (2008) 「トートロジーと主観性について」. 『日本認知言語学会論文集』 8: 212-222.
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」
- 藤田知子 (1988) 「Une femme est une femme.: X ÊTRE X 構文解釈の試み」 『フランス語学研究』 22(1): 15-34.
- 樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」 『ことばの科学』 10: 43-66. 東京:むぎ書房
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford University Press.
- 酒井智宏 (2007) 「日本語における文的トートロジーと述語的トートロジー」. 『明星大学研究紀要』 15: 162-152.
- 酒井智宏 (2010) 「トートロジーの主観性の源泉でないもの」 『東京大学言語学論集』 30: 195-214.
- 酒井智宏 (2011) 「トートロジーにおける等質化概念の混乱とその解消: 意味の共有をめぐる幻想」. 『東京大学言語学論集』 31: 269-286.
- 坂原 茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリー化のダイナミズム」. 大堀壽夫 (編) 『シリーズ言語科学3 認知言語学II: カテゴリー化』: 105-134. 東京:東京大学出版会.

使用コーパス

- 国立国語研究 「日本語書き言葉均衡コーパス」 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
[2018年3月19日 アクセス]
- 国立国語研究 「日本語話し言葉コーパス」 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/index.html
[2018年3月19日 アクセス]
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「名大会話コーパス」
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/> [2018年3月19日 アクセス]

On the Meaning of Adjectival Repetitive Construction in Japanese

Kei Sakaguchi

keisakaguchi24@gmail.com

Keywords: adjectives, homogenization of gradience, tautology, repetitive construction

Abstract

The aim of this paper is to clarify the meanings of adjectival repetitive construction in Japanese. Based on some studies about nominal repetitive constructions (Fujita 1988, Sakahara 2002, Sakai 2007 and others), this paper shows that the meanings of adjectival repetitive construction reflect three types of categorizations; (1) homogenization, (2) differentiation, and (3) heterogenization. Adjectival repetitive construction has some common with nominal repetitive construction that is as known as tautology, especially in construes that depends on differentiation and heterogenization. However, what is homogenized in adjectival repetitive construction is different from that of nominal repetitive constructions. In homogenization of nominal repetitive construction, the class-member relationship, one of semantic features of nouns, is focused. For example, in the sentence *This cat is a cat, even if that cannot hunt a mouse*, the cat who cannot hunt a mouse (one of the tokens) is homogenized by other types of cats those who can hunt a mouse. In contrast, the homogenization of adjectival repetitive construction does not so much depend on class-member relationship. This paper argues that what is homogenized in adjectival repetitive construction is the differences among gradience.

(さかぐち・けい 東京大学総合文化研究科 博士課程)